

古代日本の婚姻習俗と漢字表記（1）

胡 潔

はじめに

古代日本の婚姻に関しては、未だに解明されていないことが多い。その解明に困難をもたらした一因に、文字表記の問題がある。周知のとおり、日本上代の文献はすべて漢字で書かれたものである。これらの文献には当時の婚姻習俗に関する記述が多く含まれている。漢字が日本に伝えられ、中国語の読みに従って読まれることもあったと思われるが、日本語に翻訳して読む、所謂訓読が当初から行われていたのである。訓読を繰り返していくうちに、漢字と日本語との間に一定の関係が生じ、ここに字訓というものが発達したが、視覚的に同型の漢字でも、日本語と中国語とは意味のズレが大きい。とりわけ婚姻語彙¹に関してはそうである。古代の中国と日本の両社会の婚姻形態には大きな相違があり、中国型の婚姻語彙では日本の婚姻の事柄を十全に表現できない。そこでさまざまな工夫が凝らされた。或いは漢字を表音文

字として日本語を記し、或いは漢字の一字一字の意味を合成して新しい言葉を作る。日本古代の婚姻語彙が極めて複雑であった理由の一つは、日本語系統のものと、漢籍から借用されたもの、さらに新たに作られたものの混用にあると考える。上代の漢字文献、特に記紀の字訓に関しては、これまで漢字学研究・古典文学研究の領域において、多くの成果が積み重ねられてきたが、婚姻語彙に関する言及はおおむね断片的である。一方、民俗学では柳田國男・大間知篤三の『婚姻習俗語彙』²が刊行され、日本各地の婚姻習俗を理解する上で貴重な一冊となったが、そこに収められた語彙は嫁入婚関連のものが中心であり、古代の婚姻語彙についてはあまり言及されていない。古代日本の婚姻語彙に関して、比較的纏った記述が見られたのは、高群逸枝、西村享、栗原弘らの研究においてである³。高群は古代日本の婚姻形態の変遷を史的に捉えた上で、婚姻語彙の変化について言及している。高

群によれば、「つまどひ」の語は奈良時代、その後は専ら「よばひ」、「かよひ」、「すみ」等の語が用いられ、平安期中期になると「婿取り」が用いられるようになる⁴。古代日本の各時期の婚語彙の特徴に関する高群の指摘は必ずしも間違っていないが、あくまでも概観的な記述で、各時期の各作品の婚語彙の使用法に即して綿密に考察したものではない。一方、栗原弘は婚語彙に関する研究史を総合的に検討した上で、万葉時代の代表語は、「かよひ」であって、高群の言う「つまどひ」ではない、とした⁵。また視点は異なるが、西村享は平安時代を中心に「恋詞」⁶を一一語選んで、幾つかの項目を分けて、当時の男女の交際の段階に依りて言葉を逐次に挙げながら解説している。諸氏の研究において、示唆に富んだ言及が多くなされているが、関心の所在は和語型⁷にあり、漢字表記の問題は付随的なものになっている。本稿は一つの試みとして、日本と中国の婚姻形態の相違に着目し、婚語彙における和型と漢型の交渉を考察する。

まず漢字の表記法に基づいて四つに分けてみた。①字音表記語。漢字の意ではなく、音を借りて日本語を記したものである。最も多く用いられているのが、『古事記』、『万葉集』、『風土記』においてである。具体例としては、美斗能麻具波比⁸、摩加牟⁹、斗比¹⁰、志多杼比¹¹、登布¹²、都麻杼比¹³、都麻麻岐¹⁴、用婆比¹⁵、加用婆勢¹⁶、宇多我岐¹⁷、加我毗¹⁸、加賀布¹⁹、与波比²⁰、我欲比²¹、加欲波牟²²、夜延な

どが挙げられる。②合成語。漢字の字単位の意味を合成したもので、中国語にはない語彙である。例えば、目合、御合、歌垣、娶訛、妻問、嬬問、嬬言、嬬言などである。①と同様に、『古事記』と『万葉集』に多く見られる用字法である。③転用語。漢型的一般語彙から転用されたもので、中国語にある点では②と異なるが、中国語においては婚姻と無縁の言葉である。通、往来、相聞、嬬歌、訛などが挙げられる。①から③の語彙は漢語の発音もしくは部分的意味を利用し、中国語にない日本的概念を表したものである。④既成語。漢型の婚語彙の借用である。「婚」、「娶」、「嫁」、「聘（娉）」、「求婚」、「娉財」、「成婚」、「結婚」、「婚礼」、「媒」、「迎」などがこの類である。④の用字法の解説が最も困難である。紙幅の制限で、本稿では、①、②、③について考察し、④については統稿の「婚姻習俗と漢字表記(2)」で詳述することとする。なお、①から③に挙げられた語彙をすべて論じることではできないため、その中でも上代の婚姻習俗と密接な関係にある「うたがき」、『万葉集』の一部立名として用いられた「相聞」、さらに上代の結婚を考える時に、必ず言及される「よばひ」、「つまどひ」、「かよひ」などの語を取り上げて考察することとする。

一 「うたがき（かがひ）」

「うたがき（かがひ）」とは、「成年に達した男女が山上或いは部落の聖地に集まって、飲食・歌舞の後に性的解放を行う習俗」である。古代日本にこの習俗が存在したことは上代の文献の記述から窺い知ることができる。この習俗について、従来民俗学などにおいて主にその儀礼的側面が議論されてきたが、「うたがき」には男女結合の行事の側面があり、歌掛けは婚約行事である以上、婚姻習俗の一部分として理解されるべきである。この習俗は古代日本のみならず、中国の雲南省、貴州省、広西省など西南部に住むミヤウ族、ヤオ族、トン族、イ族、チワン族の多くの民族の間にも見られるものである。かつて大林太良が中国南部からインドシナ北部にかけて見られる「不落家」の習俗¹⁰と歌垣の分布が重なっており、古代日本の訪婚はその分布圏に連続するものだと指摘した¹¹。「不落家」と古代日本の訪婚は夫婦別居という点では類似しているものの、同じものとは言えない。また現在でも歌垣（中国では「歌会」・「歌墟」などと言う）が見られる中国西南部の民族では、必ずしも訪婚が行われていないので、両者の関連性については今後の研究を待ちたい。しかし、確かに言えるのは、「うたがき」も訪婚も男女の婚前交渉の規制の緩やかな社会に見られる習俗だということである。

「うたがき」はまた「かがひ」と言い、上代の文献の漢字の表

記には、「歌垣」（『古事記』、『続日本紀』）、「歌場」（『日本書紀』）、「嬬歌」（『風土記』）、「万葉集」の三つがある。「歌垣」は中国語としての用例は管見の限りではなく、日本語の「うた」と「かき」の合成語であろう。「垣」は中国語では、「垣、墻」、「墻垣墉也」（『新撰字鏡』所引の『玉篇』）であり、建築物、庭、敷地などを取り囲む囲いを意味する。日本の『新撰字鏡』には「障也、^{かき}加支也」、「和名類聚抄」には、「垣墻、和名賀岐^{かき}」とあり、両辞書とも中国の辞書の解釈を引用しながら、日本語の「かき」をつけている。「かき」は「かくる」「かこむ」などと系列をなす語であり¹²、「人」との関連性を示唆する用例が『古事記』や『万葉集』に見られる。例えば、崇神記に、倭日子命^{やまとひのみこと}について、割注に「此王之時、始而於^レ陵立^二人垣^一」とある。いわゆる「殉死」の一種で、陵墓の周囲に人を生き埋めにして並べることであるが、「人垣」は人が垣のように並ぶという意味からくるものである。また『万葉集』に「垣ほなす」という枕詞がある。（一）の中に『万葉集』の歌番号を記す。以下『万葉集』に関しては同・筆者注）

(3)

垣ほなす人言聞きてわが背子が情たゆたひ逢はぬこのころ
 (七二三・丹波大女娘子)

垣ほなす人の横言繁みかも逢はぬ日数多く月の経ぬらむ

(二七九三・田辺福麿)

…垣ほなす 人の詔ふ時 血沼壯士 菟原壯士の 廬屋焼
く すすし競ひ 相結婚ひ しける時は…

(二八〇九・高橋虫麿)

垣ほなす人は言へども高麗錦紐解き開けし君にあらなくに

(二四〇五)

「垣ほなす」は「人」の枕詞になつており、人言または人の多
さの比喩となつてゐる。従つて、「うたがき」も恐らく歌と遊び
に集まつてくる人々の多さを形容する語であろう。「歌垣」の表
記の初見は『古事記』である。清寧記に、大魚という乙女をめ
ぐつて袁祁命（後の顕宗天皇）と志毘臣の間で妻争いの歌が交わ
される場面がある。（歌に関しては、読み下し文を採用するが、
本稿が問題にしている言葉は原文の表記をし、かなでルビをふ
る。以下同・筆者注）

故、将レ治_二天下_一之間、平群臣之祖、名志毘臣、立_二于歌垣_一、
取_二其袁祁命将レ婚之美人手_一。其娘子者、菟田首等之女、
名大魚也。爾、袁祁命、亦立_二歌垣_一。於是、志毘臣歌曰

大宮の 彼つ端手 隅傾けり

如此歌而、乞_二其歌末_一之時、袁祁命歌曰

大匠 拙劣みこそ 隅傾けれ

爾、志毘臣、亦、歌曰

大君の 心を緩み 臣の子の 八重の柴垣 入り立たず

あり

於是、王子、亦、歌曰

潮瀬の 波折りを見れば 遊び来る 鮪が端手に 都麻

立てり見ゆ

爾、志毘臣、愈怒歌曰

大君の 王子の柴垣 八節結び 結び廻し 切れむ柴

垣 焼けむ柴垣

爾、王子、亦、歌曰

大魚よし 鮪突く海人よ 其があれば 心恋しけむ

鮪突く鮪

如此歌而、闕明各退。

右の記述から「うたがき」の幾つかの要素が読み取れる。まず場
所である。『古事記』では明記していないが、『日本書紀』武烈紀
によれば「海柘榴市」である。人々が大勢集まる市は「うたが
き」が行われる格好な場所である。次に歌の内容である。志毘が
袁祁命の住む大宮やその周りに廻らす柴垣の脆さを嘲笑するのに
対し、袁祁命は志毘を海人や魚に喩えて揶揄する。大勢の聴衆の
前で挑みあう歌掛けが歌垣の基本形であろう。登場人物こそ異な
るが、『日本書紀』の武烈紀にも相似した記述がみえ、「うたがき」
の漢字表記は「歌場」となっており、さらに「此云_二宇多我岐_一」
という注もつけられている。「歌場」も漢籍から用例を見出すこ

とは困難であるが、比較的に分かりやすい。漢語表現の規範を重要視する書紀の編者がわざわざ字音で注を付けることから、漢籍には適切な語彙が見つからず、意訳と字音表記をつけるしか手段はなかったことが窺える。ただ、それ以降の文献には「歌場」の表記が見られないことから、書紀の用字法は根付かなかったと察せられる。それに対し、「歌垣」は八世紀末に成立した『続日本紀』にも用いられ、定着を見せている。天平六年（七三四年）二月条に「（聖武）天皇、朱雀門に御して歌垣を覧す」とあり、男女二百四十余人、五品以上の「風流者」も交わって歌舞する場面が描かれている。

正四位下長田王、従四位下栗栖王・門部王、従五位下野中王等を頭とす。本末を以て唱和し、難波曲・倭部曲・浅茅原曲・広瀬曲・八裳刺曲の音を為す。都の中の士女をして縦に覽せしむ。歛を極めて罷む。歌垣を奉れる男女らに禄賜ふこと差有り。

さらに宝亀元年（七七〇年）三月条には詳しい歌垣の様子が記され、それによると、葛井、船、津、文、武生、藏の六氏から男女二百三十人が参加したとある。

男女相並び、行を分けて徐に進む。歌ひて曰く、乎止賣良余乎止古多智蘊比 布美奈良須 尔詩乃美夜古波 與呂豆乃美夜（中略）歌の曲折毎に、袂を挙げて節を為す。その餘の四

首は並に是れ古詩なり。復煩しくは載せず。時に、五位已上と内舍人と女孺とに詔して、亦その歌垣の中に列らしむ。歌、数闋訖りて、河内大夫従四位上藤原朝臣雄田麻呂已下、和舞を奏る。六氏の歌垣の人に、商布二千段、綿五十屯を賜ふ。

右の二つの記録内容を総合すると、宮廷で催された「歌垣」は、特定の男女が多数参加し、相並べて列をなし、前へ進みながら古曲を歌い、歌の節に合わせて袂を挙げるしぐさをする。官人も参加し、行事が終わったあと、参加者に禄などが与えられる、といったことが分かる。民間に見られる「うたがき」ではなく、宮廷化した一行事である。

一方、『風土記』や『万葉集』には民間で行われた「うたがき」が書かれている。『常陸国風土記』香島郡条に

（軽野）以南、童子女松原。古有二年少童子俗云：加味乃乎止 男称二那賀寒田之郎子なかのさむたのいらつこ、女号二海上安是之娘子うなかみのあぜのいらつめ。並形容端正、光二華郷里一、相二聞名声一、同二存望念一、自愛心熾、経レ月累レ日、耀歌之会俗云：字太我殿 又云：加我殿也 邂逅相遇、于レ時、郎子歌曰

いやぜるの 安是の小松に 木綿垂でて 吾を振り見ゆ
も 安是小島はも
嬢子報歌曰

潮には 立たむと言へど 汝夫の子が 八十島隠り 吾
 を見さ走り

便欲二相語一、恐二人知一之、避レ自二遊場一、蔭二松下一、
 携レ手促レ膝、陳レ懷吐レ憤（中略）天暁日明、爰童子等、
 不レ知レ所レ為、遂愧二人見一、化二成松樹一…

童子女松原の由来を語る文脈の中に出てくる「耀歌之会」である
 が、その注にも「宇太我岐」、「加我毗」の二つの発音が記され
 ている。寒田之郎子と安是之嬢子は「相二聞名声一 同二存望念一」
 の仲であり、比較的に近い村落に住む男女である。「うたがき」
 で邂逅し、歌によるやりとりを行った後、人に隠れて松林に入っ
 た、という二人の邂逅と交際は、中国西南部の「歌墟」と酷似し
 ている。清朝の学者趙翼の『簷曝雜記』の「辺郡風俗」に、粵西
 （今の広西省地区）、滇黔（今の雲南省、貴州省）地区の風俗習慣
 について紹介している。

粵西土民及滇、黔苗、猺之風俗、大概皆淳朴。惟男女之事不
 甚有別。每春月趁墟唱歌、男女各坐一辺、其歌皆男女相悅之
 詞。（中略）若兩相悅、則歌畢輒携手就酒棚、並坐而飲、彼
 此各贈物以定情、訂期相会、甚有酒後即潛入山洞中相昵者。

春に行われるこの「歌墟」においても男女が歌を交わし、互いに
 気に入った男女は贈り物を交換し、中でも即男女関係を持つ者も
 いる。寒田之郎子と安是之嬢子の交わした歌も「相悦之詞」であ

るが、競争的である。郎子から「安是の乙女が私に向かって手を
 振っているのが見える」と歌いかけ、それに応じて嬢子は、「あ
 なたこそ私を見て走ってくる」と切り返す。記紀にみえる妻争い
 の歌掛けのような険悪なものではないが、相手が自分に惚れてい
 ると戯れあう内容であり、歌で挑みあう点では共通している。ま
 た『万葉集』巻九に高橋虫磨の長歌がみえる。

鷺の住む 筑波の山の 裳羽服津の その津の上に 率ひ
 て 未通女壮士の 行き集ひ かがふ耀歌に 人妻に 吾
 も交はらむ あが妻に 他も言問へ この山を 領く神の
 昔より 禁めぬ行事ぞ 今日のみは めぐしもな見そ 言も
 咎むな （編者）東俗
 語曰二耀我比一 （二七五九）

筑波山の「うたがき」も「耀歌」という表記となっており、同じ
 く字音表記の注が付けられている。そこに集ってきた男女には、
 未婚者もいれば、既婚者もいる。先にみた『簷曝雜記』の「辺郡
 風俗」にも酷似した記述がある。

当墟場唱歌時、諸婦女雜坐。凡遊客素不相識者、皆可與之嘲
 弄、甚而相俛抱亦所不禁。並有夫妻同在墟場、夫見妻為人所
 調笑、不嗔而反喜者、謂妻美能使人悅也、否則或婦而相詬焉。

歌墟にも既婚女性が参加している。夫婦が一緒に参加すること
 もあり、妻が人と戯れ合っても夫が怒るところか、かえって喜
 ぶ、とある。このような民間の「うたがき」について、風土記や

『万葉集』では「嬬歌」と記している。「嬬歌」の出典について、井上通泰は中国六朝時代の『文選』にある左思の「魏都賦」に「或明発而嬬歌、或浮泳而卒歳」を挙げており¹³、小島憲之はさらに李賢注「巴士人歌也、何晏曰、巴子謳歌、相牽連、連手而跳歌也」を挙げている¹⁴。「巴」は中国西南部の一地方を指すので、「嬬歌」は辺地の風俗として紹介されていることは注が明瞭に示している。風土記の編者や高橋虫麿は『古事記』にある「歌垣」を採用せず、わざわざ『文選』にある「嬬歌」を用いたのは、恐らく一地方の習俗、民間の習俗、という意味を表そうとしたのではないか。要するに、「歌垣」は王権に関わる物語や宮廷の行事、言わば中央・公的の文脈に用いられ、「嬬歌」は民間の古来の風習を記述するのに用いられる。その使い分けには、王権・中央に対する民間・地方という構図が示されている。

二 「相聞」・「往来」

「相聞」は中国語の語彙である。「隣国相望、鶏犬之声相聞。民至老死、不相往来」¹⁵という文脈に用いられる「相聞」は、相手の村や家の家畜のなき声が互いに聞こえるほど距離が近いことを言う。また「自今以後、手書相聞、勿用傍人解構之言」¹⁶にある「相聞」は、手紙、消息を交わす意に用いられている。従って、「相聞」にはおよそ二つの意味がある。ひとつは、(互いに声など

が聞こえるほど)至近距離にあることで、もう一つは、互いに消息を交わす、通信することである。二つとも恋歌とは無関係である。一方『万葉集』においては、「相聞」は、「雑歌」、「挽歌」とともに『万葉集』の三大部類の一つになっており、恋歌の部立名になっている¹⁷。ここではこの部立名の選定について考えてみたい。

まず『万葉集』の「相聞」の出典であるが、これまで挙げられた出典はおよそ次の三つである

①『文選』四十二に曹植が呉季重に送った書簡中の語「適對嘉賓、口授不悉。往来數相聞」からくるもの(『万葉集古義』鹿持雅澄、国書刊行会、一八九八年)

②『文選』李善注「聞は問なり」相聞は「相問」問の異本の表現である。(山田孝雄『万葉集考叢』宝文館、一九五五年)

③晋陸雲「行矣愛德、往来相聞」の文からくるものである。(伊藤博『万葉集相聞の世界』塙書店、一九五九年)

もっとも山田氏も伊藤氏も出典は一つに限る必要がないことを強調しており、筆者も編者が幾つかの中国語の用例からならかの共通点を見出して選んだのではないかと考える。右に挙げられた三つの出典の共通点といえば、離れた者同士が消息を交わし、相手の状況を伺い、情報を交換するといったことであろう。伊藤博によると、「往来」と「相聞」とを複合させることは六朝時代か

らの慣用であり、万葉の「相聞往来」は恐らくその慣用に影響されたものである。「相聞」のみならず、「往来」の語にも注目したのは慧眼であるが、「相聞往来」と恋歌の関係性は必ずしも明白にされていない。筆者は「相聞往来」の持つ「交通性」と「応酬性」に注目したい。何故なら、訪婚は男女が別別に住む居住形態なので、婚姻関係を維持するのに、男女間の消息の往来や男性の空間移動が不可欠だからである。『万葉集』の目録に、「相聞往来」という語が多く見られる。巻十一、十二の目録には「古今の相聞往来の歌の類」の上と下になっており、巻十四の目録には、遠江国、駿河国、伊豆国、相模国、武蔵国、上総国、下総国、常陸国、信濃国、上野国、下野国、陸奥国の十二カ国の「相聞往来」が載せられ、その他に「未^レ勘国相聞往来歌百十二首」も載せられている。明らかに「相聞往来」は歌の一つの類型と見なされているのである。では、どのような歌は「相聞往来」であるか。遠江国の二首挙げておく。

ね
あらたまの伎倍^{きへ}の林に汝^なを立てて行きかつましじ眠^いを先^{さき}立た
ね
伎倍^{きへ}人の斑^{まだら}衾^{ふすま}に綿^{わた}さはだ入りなましもの妹^{むすめ}が小床^{こどこ}に
(三三五三)
(三三五四)

二首とも男の歌である。三三五三番歌は、「伎倍の林におまえを立たせて(待たせて)いながら、今夜は行けそうもない。先に寝

てください」の意で、三三五四番歌は、「入りたかったのに、妹の床へ」の意である。女性のところへいけない時に、待っている女性の気持を配慮して詠んだものと理解されよう。

わが背子を大和へ遣りてまつしだす足柄山の杉の木の間か
(三三六三)

足柄の箱根の山に粟蒔きて実とはなれるを逢はなくもあやし
(三三六四)

右の二首は女の歌である。三三六三番歌は、夫を大和へ送りだした後、再び訪ねてくるのを待ち続けなければならない女性の心情を詠んだものである。三三六四番歌は、箱根の山に粟が蒔いて実ったように、私の恋は成就したのに、今日は相手が来ない(逢えない)のがおかしいという意で、相手の来訪を催促する歌である。これらの「相聞往来」の歌は訪婚社会の男女の、非常に具体的に、実用的な相互連絡である。今でいうと手紙に当たるものである。『万葉集』では「使^{つかひ}」も多く詠まれているので、男性本人の通いか、使^{つかひ}が行き来するかの「往来」が頻繁に行われていた。この日常性、実用性と空間的の往来の意味を響かせた「相聞往来」が複合語として受容された可能性が高い。「往来」は実際人間の空間移動を意味する言葉で、ここでは訪婚による男性(またはその使)の空間移動を意識した言葉である。「相聞往来」の用例を一つ挙げると、

大伴宿祢家持贈二坂上家大嬢一詞二首【離絶】
【復会】
忘れ草わが下紐に着けたれど醜の醜草言にしありけり

（七二七）

これは、大伴家持が坂上大嬢に送った歌二首の中の一首で、あなたを恋する恋の苦しみを忘れようと思つて忘れ草を下紐に着けたけれども、何の役にも立たない馬鹿草め、言葉ばかりだった。あなたを忘れることができなかった、と詠んだ歌である。題詞の割注にある「離絶」は、離婚の意ではなく、日本語の「サカル」と「タユ」の複合語ではないか。「サカル」は、とおさかる、離れるという意で、「タユ」は、途絶えるという意である。後続の「復会」の「会」は日本語の「あふ」で、対面は原義であるが、婚姻用語としては男女の逢瀬を意味する。割注から、数年途絶えた男が再び女性の許へ通い始め、関係を再開した、という状況が読み取れる。この「相聞往来」は、二人の間で行われる消息のやり取りを意味すると同時に、男性の、女性の許へ通う行動そのものをも指している。「往来」は消息と男性本人の訪婚の往復を意味することは、律令に関する注釈によっても裏付けられる。日本令の戸令に結婚の成立を規定する条文にある「凡結婚已定、無レ故三月不レ成、及逃亡一月不レ還。若没ニ落外藩一。一年不レ還。及犯ニ罪徒罪以上一。女家欲レ離者。聽之」という文言にある「無レ故三月不レ成」について、諸注では「男夫無ニ障

故ニ不レ来也」（古記）と説明しており、婚約解消の条件として、「若夫婦在ニ同里一、而不ニ相往来一者。即比ニ無レ故三月不成レ離也」（義解）とか「在ニ同里一不ニ相通一者、比ニ已成逃亡之法一合レ離」（跡記）と解釈している。ここで言う「往来」は実際男性の通いを指していることは明らかである。訪婚の持つ交通性を考え合わせると、恋歌を総べる部立てに「相聞往来」を選定した撰者の意図もおのずから了解されよう。

三 「よばふ・よばひ」

「よばふ」は、「呼ぶ」を語源とする語で¹⁸、「よばひ」はその名詞形である。字音文字には「用婆比」（『古事記』）、「夜延」（『万葉集』）、「與波不」（『日本霊異記』）などがある。『古事記』に八千矛神の求婚歌がみえる。

八千矛の 神の命は 八島国 妻枕きかねて（都麻麻岐迦泥豆） 遠遠し 高志の国に 賢し女を 有りと聞かして 麗し女を 有りと聞こして さよばひに（佐用婆比邇） あり立たし よばひに（用婆比邇） あり通はせ（阿理加用婆勢）：

八矛神の神が国中に妻を求めかねていたが、遠い越（高志）の国に聡明で美しい女性がいると聞いて、求婚しにきた、という内容の歌であるが、求婚行為は「よばひ」という語で示されている。

歌の中にある「ありたし」とは、その戸の前はずっと立ち続けることで、「ありかよはせ」は女性のところへ通い続けることを言う。求婚するための具体的な行動である。時代は下るが、平安時代の『竹取物語』に登場する、かぐやひめの求婚者たちは、「日暮るるほど、例の集まりぬ。あるいは笛を吹き、あるいは歌をうたひ、あるいは声歌をし、あるひは嘯ぶき、扇を鳴らしなどする」とある。相手を呼ぶ、というのが「よばひ」の原義であろう。声や音楽で求愛することは相手を呼ぶことに繋がるので、相手が応じてくれるまで呼び続けることが「よばふ」である。これもなぜこれまで多くの研究者が「よばひ」を「求婚」を意味する言葉として認定した理由であろう。ただ、この語は求婚の意味のみならず、結婚後の、男性の訪問（＝通い）の行動にも用いられる。

隠口の 泊瀬小国に よばひ為す（夜延） わが天皇よ
 奥床に 母は寝たり 外床に 父は寝たり 起き立たば 母
 知りぬべし 出で行かば 父知りぬべし… (三三二二)

泊瀬の国に私を訪ねてきたすめろきよ、奥のところに母が寝ており、外側の床に父が寝ています。私が起き立ったらば、母が気づくでしょう。出で行ったらば、父が気づくでしょう、という意の歌である。こここの「よばひせす」は求婚行為ではなく、男性が実際女性の許へ通ってきたことをいう。中国西南部に住むモソ族に

も類似した歌がある。

(男) 妹よ、私は来た。今宵来ると約束したからだ。早く戸をあけてくれ。

(女) 兄よ。今は来ないで。小鳥はまだ木の上の巢に戻っていない、月はまだ出ていない。

(男) 妹よ、私は来た。外には蚊が多く、刺されてたまらない。

(女) 兄よ。今は来ないで。囲炉裏の火はまだ消えていない、お婆様はまだ寝ていない。

(男) 妹よ、私は来た。毛皮の服が短くて、寒くてたまらない。

(女) 兄よ、今は来ないで。入りたければ、戸はさしていい。音を出さないで。

(男) 妹よ、私は来た。野良犬が怖くて、噛み付かれて痛くてたまらない。

(女) 兄よ、今は来ないで。松明の火を消したが、まだ完全に消えていない。

(男) 妹よ、早く戸をあけてくれ、家の梁の上に子夜の雄鶏が今にも鳴きそうだ

(女) 兄よ。入りなさい。こっそり入って、音を出さないで。¹⁹ これも男性が女性の家の前で交わされる歌である。夜は訪れ、朝は離れるという訪婚において、男女の逢瀬は秘密裏に行うことが

重んじられており、通ってくる男性はなんらかの方法で自分の到着を妻に知らせて、妻の家族に悟られないように入る。モノ人社会においても男女間の自由な交渉が行われ、本人同士は気があえば訪婚可能である。従って、「よばひ」を「求婚」の意味に限定するのは無理であろう。むしろ、当時の結婚形態から考えて、求婚、男女関係を結ぶという流れの中でこの語の位相を見極めるべきである。「よばひ」という語は女性になんらかの方法で自分の意中を伝えたり、また自分の到着を知らせたりする意の語であるが、求婚であるか、訪婚であるかは男女二人の関係の段階によって決まる。この意味では、「過去に性関係があるなしにかかわらず、男性が女性の許へセックスを求めていく行為」²⁰とする栗原弘の説は妥当であろう。「よばひ」に宛てられる漢字を見ると、『古事記』では「佐用婆比爾」、『万葉集』では「娉」、「結婚」、「日本書紀」では「聘」が用いられている。日本語の「よばふ・よばひ」は「よぶ」という口頭による伝達を意味することを語源とするのに対し、「聘」は「時聘日問」（『周礼』）とあり、「問」と互訓する言葉で、礼節を以って相手を尋ねるまたは相手を招くなどの意味を持つ言葉である。婚姻語彙としての「聘」には、正式に女性側に求婚し、受け入れられたら迎えるという礼儀的な意味がある。「よばひ」の例を具体的に見ると、求婚の主体は男性個人で、女性の家のあるところへ行き、戸口で歌を歌って

意中を表明したり、または歌垣で歌を以って相手に意中を伝えることであろうが、女性を求める点では、「聘」（娉）の意に通じており、また相手と男女関係を結ぶ点では「結婚」の意に通じている²¹。「よばひ」という語の持つ求婚と結婚の両義性が、漢型の婚姻語彙の選定にも映し出されている。

四 「つまどひ・つまどひ」

「つまどひ」およびその名詞形の「つまどひ」は、日本上代の婚姻語彙の中でも重要で、高群逸枝が上代の婚姻形態を「妻問」と命名するほどである。この語の字音表記には「都麻杼比」（『古事記』）、「都麻度比」（『万葉集』）があり、表意表記には「妻問」、「孀問」「孀言」（『万葉集』）などがある。後者は日本語の発音に基づいて合成された和製漢語で、中国語にない概念である。これまで「つまどひ」と「よばひ」の相違に関する議論が多くなされてきたが、総じていえば、「よばひ」と「つまどひ」がほぼ同意であるとする見解と、「よばひ」は求婚で、「つまどひ」は結婚であるとする見解とに分かれている²²。筆者は、両語そのものは、必ずしも求婚、結婚で分けられるものではなく、共通の部分を持ちながら、それぞれ異なった語義を持つものだと考える。「よばひ」は「呼ぶ」という発声行為に重点が置かれており、相手は限定しない。それに対し、「つまどひ」は「つま」を冠した

言葉なので、限定的である。「つま」は「汝こそは 男にいませば うち廻る 島の崎々 搔き廻る 磯の崎落ちず 若草の都麻つつま持たせらめ 我はもよ 女にしあれば 汝を除て 夫は無し 汝を除て 都麻つつまは無し」(『古事記』大国主神)とあるように、男性の異性相手と女性の異性相手の両方を指す言葉であり、男女一対の関係を意識した言葉である。八千矛神が、高志国^{たけし}之沼河比売に求婚にいった時に、「よばひ」、「かよひ」などの語が用いられるが、「つまどひ」は用いられていない。「つま」は一般的にいえば、男女関係が結ばれた間柄を指す言葉だと思われるが、求婚する相手の女性を「つま」と呼ぶこともある。先にみた、『古事記』清寧記の妻争いの場面では、袁祁命はまだ結婚していない大魚を「つま」と呼んで、女性に対する占有権は我が方にあると強調する場面を想起すれば了解されよう。要するに、婚姻語彙としての「つまどひ」は、「つま」と認識している女性の意向を尋ねる、というのをもっとも素直な説明ではないか。「つまどひ」の「つま」に漢字の「妻」、「孀」、「媼」が宛てられたのは、「とふ」相手は女性だからであろう。古代日本の訪婚では、男性が女性を訪問するのが一般的である。所謂「妻訪婚」である。「妻」は『説文解字』では「婦与己齊者也」、「孀」は「弱、一曰、下妻也」となっている。日本の『新撰字鏡』においても「孀」を「妾名、劣、弱」と説文を踏襲しているが、『万葉集』の用例を見ると、「つま」の

意にすぎない。むしろ「孀人」の意味として「孀」が用いられたと考えたほうが納得がいく。『礼記 曲礼』に「天子之妃曰后、諸侯曰夫人、大夫曰孀人」とあり、大夫の妻は「孀人」という言葉になっている。『万葉集』には「大夫」が「ますらを」を意味することを考え合わせれば、その「つま」に「孀人」の「孀」の字を用いる蓋然性が高い。「孀」は「孀」に変えたのは、恐らく女性を強調するためであろう。ただ、女性を指すはずの「孀」は男性を指す用例も見られる。『万葉集』に

草枕くさまくら 羈宿尔たひのどりに 誰孀可たがつまか 国忘有こけわすれたる 家待真国いえまたまくに (四二六)

これは柿本朝臣人麿が香具山かぐねに屍かたねを見て作った挽歌である。旅先この香具山に横たわって国を忘れているのは誰の夫であろう。家族が待つているであろうに、という意の歌であるが、「孀」は男性を指している。恐らく「つまどひ」の語に宛てられた漢字につられて、単独で使う時にも「孀」を用いたことから生じた、漢字と和訓の意味上のズレである。「孀」は「麗」に通じ、美しいという語義を持つ語であるが、その出典について、木村正辞は『後漢書』曹皇后紀「祁祁皇孀」の李賢注「孀亦麗也」を挙げている²³。小島憲之によれば、「孀」(うるわし)の文字と「麗」(偶・匹)の訓詁によって「つま」に宛てたものである²⁴。『万葉集』の用字法には、女へんをつける傾向がみられる。「聘」は「媼」に、「孀」は「孀」に、「麗」は「麗」に変えられたのはそ

の好例である。

一方、「妻・孀・孀」の後に附く漢字は「言・問」である。「問」は『説文解字』、『玉篇』や『広韻』では、「訊也」として「問」と「訊」を互訓しており、『爾雅』では「聘、問也」として、「聘」と互訓しているところから、「問」の基本的意味は、相手に聞く、相手の状況を尋ねるといふ二つである。日本の『類聚名義抄』では「トフ オクル トフラフ」とみえる。一方、「言」は『玉篇』では、「言」は「言辭也、問也我也」とあり、「問」と「言」を互訓している。「よばひ」は「よぶ」を語源としているので、発声に重点が置かれてると先述したが、「とふ」は相手の意向を伺う意の語である。異性に求愛し、その意向を伺う、というのが恐らく最も基本的な意味ではないか。歌垣などで自分と一対をなす異性に贈るものだから「つまどひのもの」となるのである。男性が女性のもとへ訪れるという意味はむしろ派生的なものである。「つまどひ」の用例を見ると、主に以下三つの用法が挙げられる。

イ 動物が異性を呼ぶ呼び声

①…あしひきの 山鳥こそば 峯向ひに 孀問すといへ 現世
の 人なるわれや 何すとか 一日一夜も 離り居て 嘆き
恋ふらむ… (二六二九・大伴家持)

②奥山に住むとふ鹿の初夜さらず妻問ふ萩の散らまく惜しも

(二〇九八)

③秋萩の咲きたる野辺はさ男鹿そ露を分けつつ孀問しける

(二一五三)

ロ 処女塚伝説

④古に 在りけむ人の 倭文幡の 帯解きかへて 伏屋立て
妻問しけむ 葛飾の 真間の手児名が 奥つ城を こことは
聞けど… (四三二一・山部赤人)

⑤古の ますら壮士の 相競ひ 妻問しけむ 葦屋の 菟原処
女の 奥津城を わが立ち見れば… (二八〇一・田辺福麿)

⑥古の小竹田壮士の妻問ひし菟原処女の奥津城ぞこれ

(二八〇二・同右)

⑦古に ありけるわざの 奇ばしき 事と言ひ継ぐ 血沼壮士
菟原壮士の うつせみの 名を争ふと たまきはる 命も捨
てて 相共に 孀問しける 少女らが 聞けば悲しさ… (四二二一・大伴家持)

(四二二一・大伴家持)

ハ 七夕、竹取の翁などの伝説

⑧天の河い向ひ立ちて恋ふらむに言だに告げむ孀言ふまでは
恋ふらむ… (二〇一一)

⑨高麗錦紐解き交し天人の妻問ふ夕ぞわれも偲はむ

(二〇九〇)

⑩安の河こ向ひ立ちて年の恋日長き子らが都麻度比の夜ぞ

(四二二七・大伴家持)

⑪昔老翁ありき。号を竹取の翁と曰ひき。

：日曝の 麻紵を 信巾裳なす 愛しきに取りしき 屋に経
る 稲置丁女が 妻問ふと われに遣せし をちかたの 二

綾下沓 …… (三七九一)

イ群は山鳥、鹿などの動物の異性を呼ぶ鳴き声を詠んだものである。作者未詳の歌が多いことから、古くから詠まれる一類型と推測される。雌雄一对の鳥獸が異性をもとめる鳴き声を「つまどひ」と比喩的詠む歌である。ロ群の処女塚伝説は古くから日本人に愛されてきた伝説の一つである。『万葉集』にはいくつかの類話が見られ、④真間の手児名、⑤と⑥の菟原処女はその伝説のヒロイン達であり、複数の男性に求められて自ら命を絶った悲話である。④に挙げられた真間の手児名の場合は、土屋文明が指摘したように、求婚ではなく、結婚している状態を指す²⁶。たしかに「帯解きかへて 伏屋立て 妻問しけむ」とある内容から考えても、男性が通っている状態と理解されるべきであろう。⑤、⑥は菟原処女の話で、二人の男に求められるという文脈の中で用いられる「妻問」である。「つま」という言葉は限定的に相手となる女性を指すものだと考えると、関口裕子、栗原弘らが指摘した²⁶ように、二人の男性がすでに通っていると理解してもおかしくないが、『古事記』の

妻争いの歌掛けにも自分の「つま」と強調して競うことがあると思われる。処女塚伝説歌の多くは万葉第四期の作者の詠で、過去に対する回想として詠まれるのが特徴的である。伝説であるという点ではハ群と同じである。ハ群は七夕、竹取の翁などの伝説の歌である。⑧～⑩の三首において、天の河を渡って妻を尋ねることが「妻問」と詠まれている。「つま」の許へ行く意に用いられた用例である。⑪の竹取の翁の歌の中に出てくる「妻問」は、少々難解であるが、稲置丁女が竹取に渡した「二綾下沓」は、通ってくる竹取に対する贈物と理解できよう。それも若い時の回想として詠まれている。『万葉集』編纂時において、「つまどひ」という言葉は動物の、相手を求める鳴き声のほか、乙女塚や七夕のような伝説及び竹取の翁の歌のような往昔の回想に用いられていることは看過されまい。実在した人物の求婚また訪問行為を表すには基本的に用いられない²⁷。実在する人物の求婚や訪問は漢字の「娉」や、「結婚」などといった中国の婚姻語彙が宛てられている。万葉時代、少なくとも『万葉集』の編者には、「妻問」・「孀問」・「孀言」などの合成語と漢字の「娉」や「結婚」などの漢語系の婚姻語彙とを区別しようとする意識が看取される。つまり、和型の「つまどひ」は、往昔を意味する回想、伝説に用いられ、漢型の「娉」や「結婚」は、現在を意味する実在した人物達の求婚乃至結婚について用いられているのである。

五 「かよふ」「かよひ」

「かよふ」とその名詞形の「かよひ」は、古代日本の婚姻語彙の中においても、最も長く、広く用いられた言葉である。字音表記として「迦用婆勢」（『古事記』）、「可欲波牟」（『万葉集』）があり、表意文字として「通」が最も多く、「往来」も数例ある。「妻問・孀問・孀言」などの和製合成語と異なり、「通」「往来」は中国語にある言葉である。ただ、「通」も「相聞」と同様に中国語においては結婚語彙ではない。『周易』（王弼注）に「往来不窮謂之通」（周易繫辭上第七）とみえ、継続した「往来」の状態は「通」である、という。『周易』で言う「往来」と「通」は、双方による交流の状態を言うが、日本語の婚姻語彙としての「かよひ」は、男性による空間的往復を意味する言葉である。「通」「往来」が「かよひ」の漢字表記として選ばれた理由は、ほかならぬこれらの語の持つ「空間往復」の意味にある。『万葉集』の用例を見てみる。

- ① かくのみし恋ひば死ぬべみたらちねの母にも告げつ止まず通はせ（二五七〇）
- ② 多由比渴潮満ちわたるいづゆかも愛しき背ろが吾がり欲波牟かよはむ（三五四九）
- ③ 大野路は繁道森道繁くとも君し通はは道は広けむ（三八八一）

①は、こんなにも恋い焦がれるときつと死んでしまふであろうから、母にもあなたのことをうちあげた。いつでも通っておいでください、と男の絶えることなく通ってくることを促す。②は、多由比渴に潮が満ちている。恋しいあの人はどこを通って私のところへくるかしら、と相手の道中のことを案じながら待っている女心を詠んだものである。③は、大野路の道は草木が茂って歩きにくい道でも、あなたが通ってくるならば、道はきつと広がるであらう、と詠んで、同じく男が常に通ってくることを促す歌である。『万葉集』には男の通いの道中の事情を案じる女歌が多く、空間移動を伴う訪婚社会ならではの感覚といえよう。

- ④ 春日野の山辺の道を恐おそなく通ひし君が見えぬころかも（五一八・石川郎女）
- ⑤ 常止つねやまず通ひし君が使来つかいず今は逢はじとたゆたひぬらし（五四二・高田女王）
- ⑥ 人の親の少女をとめこ据すゑて茂る山辺から朝あさな朝あさに通ひし君が来きねばかなしも（二二六〇・柿本人麿）
- かつて頻繁に通ってきた相手もこの頃姿を見せてくれない。その時、女性は歌で相手の気持を確かめる。「恐なく通ひし君」④、「常止まず通ひし君」⑤、「朝あさな朝あさに通ひし君」⑥とまず男性がかつて頻繁に通っていたことを挙げながら、通いが途絶えた今と対比させ、男の変心を咎め、自分の不安を詠む類型と

なっているのである。

⑦ 水底みなさこに生ふる玉藻の生ひ出でずよしこのころは斯ごとくて通とほはむ

(二七七八)

⑧ …… 新夜あらたよの ささく通とほはむ 事こと計はかり 夢に見せこそ 劔つるぎ刀たち

(三三二二七)

⑨ 足の音せず行かむ駒こまもが葛飾かきの真間の継つぎぎ橋はし止とどまず可か欲ほ波は牟む

(三三二八七)

⑦～⑨の三首とも男の歌である。⑦は、水底に生える玉藻が水の上には伸びないように表面には出ず、当分は、人目につかないで、このまま人目を忍んで女の許へ通うことにしようという意の歌で、⑧は長歌で、毎晩毎晩新たに元気で通うための計らいを神に祈るものである。⑨は足音せずに行く駒がほしい、葛飾の真間の継橋をいつも女のもとに通いたい、という。男歌には人目を気にしながらも「かよはむ」と詠むものが多い。いつまでも愛する女性の許へ通おうという男性の誓いの気持を詠む一つの類型である。これは「かよふ」という動詞のみならず、空間移動を表す「くる」「ゆく」も同じ傾向がみられる。『万葉集』の時代では、絶えず通うことは男女関係の理想形であって、一緒に住もうという発想は見られない。しかし、平安時代の和歌集や歌物語語になると、詞書における「かよひ」が「すみ」などの、同居を示唆する言葉によって相対化され、婚姻関係の一段階を表す語に変わったこ

とが見逃せない。

ある人、この哥はむかし大和の国なりける人の女に、ある人
住あみわたりけり。この女親もなくなりて、家も悪くなり行く

あひだに、この男河内の国に人をあひしりてかよひつ、か
れやうにのみなりゆきけり。 (『古今集』九九四番歌詞書)

「住みわたる」とは、男性の訪婚が安定した状態にあることを言うか、妻の家に住んでいることを言う表現である。当該歌の詞書には、「かよひ」と「すみ」の両語が用いられ、もとの妻の許は「住みわたりけり」といい、新しい妻の許は「かよひつつ」と表現している。比較的安定した関係を表す「住み」は、未だ容易に離れることは右の例からも了解されるが、往復を表す「かよひ」より、定着の語感の強い言葉である。この両語の差異は、訪婚の状態の変化を示唆するものである。『万葉集』では、男女二人の贈答の歌群があるが、通っているうちに次第に住み着くような時間的な推移と一緒に住もうとする歌の類型はまだ見られない。

まとめ

婚姻語彙における和型と漢型の交渉を、「うたがき(かがひ)」、「相聞・往来」、「よばひ」、「つまどひ」、「かよひ」などの語を通して考察してきた。「うたがき」には「歌垣」、「歌場」、「嬬歌」

の三つの漢字表記があるが、その使い分けには一定の意味があった。「歌場」は書紀独自の表記で、「歌垣」は後の史書『続日本紀』にも用いられている。一方、民間の「うたがき」の漢字表記には、中国の地方風俗を意味する「嬺歌」が採用された。「歌垣」は「歌」と「垣」の合成語で、中国語にない言葉である。一方、「嬺歌」は漢籍にある言葉であるが、「土人の歌舞」として用いられている。同じ「うたがき」も王権、宮廷にかかわる事柄を「歌垣」、民間で行われるものを「嬺歌」と使い分けがなされたことが指摘できる。

「相聞」は六朝時代の文献に多く用いられている言葉である。もともとは至近距離にいる相手の意と、空間的に離れた者同士の間交信を表す語である。それが『万葉集』の恋歌を総べる部立名に選定された理由の一つに、訪婚という婚姻形態があると考えられる。男女が別別に住む訪婚社会では、男女間の消息の往来や男性の空間移動が不可欠だからである。

「よばひ」は「よぶ」を語源とする言葉で、声を出して相手と呼ぶことが原義であるが、婚姻語彙の「よばひ」は歌や音楽を出して異性を求めることである。一方、「つまどひ」は、「つま」と認識している異性の意向を伺う、求愛をするという意味の言葉であるが、訪婚社会では、女性のもとへ訪問することによって実現されるので、「つまどひ」は次第に妻を訪問する意味になった

と考えられる。「つまどひ」の漢字表記「妻問」、「嬺問」、「嬺言」は漢字の一字の意味を合成した言葉であるところから見ても、漢籍にそれ相当な表現がなかったと考えられる。

この論文の冒頭に述べたように、字音表記語、合成語、さらに漢型一般語彙から転用された転用語の三種類の語彙は中国語の発音もしくは部分的意味を利用したものの、中国語にない日本の概念を表したものである。そこには日本の婚姻語彙の特徴を見出すことができる。「よばひ」「とひ」などの和型、「相聞」、「妻問」、「嬺問」、「嬺言」などの漢字表記には口頭によるコミュニケーション、男女の直接交渉を示唆する言葉が多いこと、さらに、「通」、「往来」、「往還」などの空間移動を表すものが多いことを特徴として指摘することができる。

1 本稿で言う婚姻語彙とは、求婚（求愛）から成婚、さらに婚後に関する一連の用語を指す。なお、「相聞」、「嬺歌」などの語は、厳密に言えば婚姻語彙ではないが、古代日本の婚姻習俗と密接に関わる語なので、考察範囲に入れる。

2 柳田國男・大間知篤三『婚姻習俗語彙』（国書刊行会、一九三七年）

3 高群逸枝『招婚婚の研究』（講談社、一九五三年）、西村亨『新考王朝恋詩の研究』（おうふう、一九九四年）、栗原弘『万葉時代婚姻の研究』（刀水書房、二〇一二年）。

- 4 高群注3前掲書二三三頁
- 5 栗原弘注3前掲書二四一頁
- 6 西村注3前掲書。西村が用いた「恋詞」は、著書の内容からみて、必ずしも恋愛と婚姻を区別していないので、恋愛、婚姻に関する語彙と理解される。
- 7 ここで言う「和語型」とは、日本古代社会に自生的に形成された恋愛・婚姻に関する語彙である。また、「漢語型」とは、漢字によって表された恋愛・婚姻語彙である。論文の中では、「漢型」と「和型」と略称する。
- 8 内田るり子「照葉樹林文化圏における歌垣と歌掛け」(『文学』一九八四年十二月)
- 9 土橋寛「古代歌謡と儀礼の研究」(岩波書店、一九六五年)三九四頁、四九六頁。
- 10 「不落家」とは、結婚した後、妻が直ちに夫方居住を開始するのではなく、一定期間年に数回(夫方からの要請、祭日)の夫方訪問以外は婚前と同様に実家において労働を続けながら居住し、三四年後に夫方居住を開始する結婚形態である。
- 11 大林太良「古代の婚姻」(『古代の日本2 風俗と生活』角川書店、一九七一年)二〇六～二〇七頁
- 12 白川静「字訓」(平凡社、一九八七年)「かき」の項
- 13 井上通泰『万葉集新考 卷九』(井上通泰上代関係著作集)三(秀英書房、一九八六、但し、原著は大正年間のものである)一九八〇頁
- 14 小島憲之「上代日本文学と中国文学 中」(塙書店、一九六四年)一一〇九頁
- 15 『老子道德経』。「芸文類聚」卷十一帝王部には「莊子曰」として引用されている。唐太宗勅撰の『群書治要』では徳経の小国寡民に「雞狗之聲相聞、民至老死不相往來」とあり、『莊子』にも「雞犬之音相聞、人至老死而不相往來」とある。
- 16 『後漢書』隗囂伝かいつう
- 17 山田孝雄は、相聞歌には男女間のみならず、親子兄弟友人の間で交わされるものも含まれていたことから、相聞は「往復存問の歌」(『万葉集考叢』宝文館、一九五五年)とした。それに対し、伊藤博は、親族朋友間の歌があっても、これらの歌には男女間の恋歌を擬して詠まれるという一貫とした特色があることから、相聞を「男女性愛の歌を主とする個人間の私情を吐露した歌」(伊藤博『万葉集相聞の世界』塙書店、一九五九年、二一九頁)とした。さらに鈴木日出男は相聞歌を「実際には男女間で詠み交わされる恋の歌」(『古代和歌史論』、東京大学出版社、一九九〇年、一八六頁)と定義している。
- 18 折口信夫「最古日本の女性生活の根柢」一九二四年。但し、筆者が見たのが中央公論社が一九六五年が刊行した『折口信夫全集』第二巻収められたものである。
- 19 『中国歌謡集成雲南卷』(下)、新華書店、一一九四～一一九五頁。歌の日本語訳は筆者が試訳したものである。
- 20 栗原注3前掲書二二二頁
- 21 聘(媵)、結婚などの中国語の婚姻語彙の用法については、続稿で詳述する。
- 22 「よばひ」と「つまとひ」に関する議論は、注3栗原弘の著書に詳細な紹介があり、参照されたい。
- 23 木村正辞『万葉集文字辨証』上巻(早稲田大学出版社、一九〇四年)五十三頁～五十六頁
- 24 小島憲之注14前掲書八一〇頁

- 25 土屋文明『万葉集私注』（筑摩書房、一九七六年）三二―二七五頁
- 26 関口裕子『処女墓伝説歌考』一八八―二〇二頁、栗原注3前掲書六〇五―六〇六頁
- 27 『万葉集』において、実名の人物に用いられたのが僅少で、管見の限り、湯原王の歌に対する某娘子の返歌「わが背子が形見の衣婦問にわが身は離けじ言問はずとも」の一首のみである。